

保育系学生の保育実践力と学内学習習得度の関連性について

海野展由 高 向山 富田知可子 小野真裕美

こども健康学科

The Relationship between the Childcare Practical Skills of Nursery Students and the Degree of Acquisition within the University

Hiroyoshi UNNO, Xiangshan GAO, Chikako TOMITA and Mayumi ONO

要 旨

2015年度の保育系学生の保育実践力と学内学習習得度の関連性についての予備研究^(註1)に続き、調査対象者を増やして専門教育科目群及び保育実習科目、教育実習科目の評価を調査内容とした。対象とした専門教育科目群65科目の平均値と標準偏差を算出したところ、23科目について正規分布が認められ、「知識」因子と「感性」因子を抽出した。またクラスター分析により、学内学習習得度の高い学習得意群は保育・教育実習評価が高く保育実践力との強い関連性があることが示された。知識、感性、実践力などのキーワードは学力の3要素とも関連するものであり、学内学習の成果が保育実習に生かされることを確認した。

キーワード：学内学習習得度、保育実践力、学力の3要素

Abstract

Following research on similar themes in the academic year of 2015, we increased the number of subjects to be surveyed this year. We analyzed the evaluation of specialized education courses, childcare practice courses, and teaching practice courses. The calculation of the average value and standard deviation of the 65 subjects in the specialized education subject group gave a normal distribution for 23 subjects, and extracted the "knowledge" and "sensitivity" factors. These analyzes showed that the group that attained high scores in the university strongly correlated with childcare practical ability because of high childcare and educational practice evaluation. The keywords such as knowledge, sensibility, practical skills and so on are related to three elements of academic ability, and we confirmed that the result of the in-campus learning is utilized for nursing practical training.

Keywords : Campus learning acquisition level, Childcare practical skills, Three elements of academic ability

註1 参考文献10)

1. 問題提起と目的

予備研究では、保育の対象理解や保育の内容・方法に関する科目群「指導表現系」因子と、保育と教育の本質・目的を社会や文化、環境など様々な背景から捉えようとする科目群「保育背景理解系」因子の2つで暫定的に学内教育尺度を作成した。この尺度と保育実習評価との関連性を検証すると、「指導表現系」因子において高得点の学生は実習においても高い評価を得ていたが、「保育背景理解系」因子において高得点の学生の中には必ずしも実習において高い評価を得られたという訳ではなく、また、低得点の学生の中には実習において高い評価を得た学生もいることがわかった。ただし、調査対象数は52名と少なく、データの蓄積による継続的研究が必要であるとの課題が残されていた。

そこで、今回は調査対象を103名に増やし、保育系学生の保育実践力と学内学習習得度の関連性について継続的に考察することを研究目的とする。

2. 調査対象

2013年度よりT大学 K学科に在籍する2学年分の学生で、保育実習・教育実習を実施した103名(男性12名、女性91名)とする。

3. 調査内容

3年次前期までに履修した必修・選択必修の専門教育科目群及び保育実習科目、教育実習科目の評価を調査内容とした。なお、対象とした保育実習は保育所での観察を中心とした2週間の児童福祉施設実習Aを指し、教育実習は幼稚園における4週間の責任実習を含めたものであった。

4. 分析方法

(1) 項目分析—調査内容とした専門教育科目群65科目の平均値と標準偏差を算出し、おおむね正規分布を示す科目を抽出し、分析対象科目とする。その際、「秀」、「優」、「良」、「可」、「不可」の評価に対して、それぞれ5～1点に得点化した。

(2) 因子分析—Windows版IBM SPSS Statistic Ver.23を用いて最尤法で探索的因子分析を行った。なお、実習科目の評価に関しては因子分析には使用せず、クラスター分析に使用した。

(3) クラスター分析—因子分析で得られた尺度を用いてクラスター分析を行い、グループ(群)を構成した。

(4) 保育実践力を表す変数として、保育実習評価および教育実習評価を合成し、クラスター分析で得られたグループ(群)との関連性を検討した。なお、合成変数を作成するにあたっては、分析の時点でどちらかの実習評価が下されていない場合は分析から除外した。該当者は11名であった。

5. 分析結果

(1) 分析対象科目の選定について

65科目の専門教育科目のうち、42科目については正規分布が認められなかったため、以降の解析から除外した。つまり、因子分析に用いたのは23科目であった(表1)。

表1 解析に用いた科目一覧

教育方法
小児保健Ⅱ
教育心理学
こどもの安全指導
教育原理
こどもの保育
こどもの養護
幼児の障害理解
学校保健指導論
家庭支援論
保育内容総論Ⅰ
国語
教育・保育課程論
保育者論
造形表現
保育内容(言葉)
保育内容(造形表現)
合唱
音楽表現基礎演習
こどもの健康指導
幼児音楽Ⅰ
保育内容(音楽表現)
乳児保育演習

(2) 分析対象科目の尺度得点の算出について

23科目(23項目)に対して、最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った結果、因子パターン行列を考慮して2因子を抽出した。(表2)

因子1は、「教育方法」(0.78)、「小児保健Ⅱ」(0.74)、「教育心理学」(0.68)、「こどもの安全指導」(0.63)、「教育原理」(0.62)などの16項目に高い因子パターンを示している。この因子に集まった科目は、教育・保育・保健・造形・心理などと多岐にわたるが、全体的に一定の基礎知識を基に知識による表現にやや偏重する特徴から、因子名を「知識」と命名した。この因子の内的一貫性を表す α 係数は0.89であった。

因子2は、「合唱」(0.65)、「音楽表現基礎演習」(0.65)、「こどもの健康指導」(0.55)、「幼児音楽Ⅰ」(0.52)、などの6項目に高い因子パターンを示した。この因子には

表2 科目群の因子分析(最尤法・プロマックス回転)結果

科目	因子1 知識	因子2 感性
教育方法	0.78	
小児保健Ⅱ	0.74	
教育心理学	0.68	
こどもの安全指導	0.63	
教育原理	0.62	
こどもの養護	0.62	
幼児の障害理解	0.60	
学校保健指導論	0.59	
家庭支援論	0.59	
保育内容総論Ⅰ	0.57	
国語	0.57	
教育・保育課程論	0.56	
保育者論	0.52	
造形表現	0.51	
保育内容(言葉)	0.45	
保育内容(造形表現)	0.39	
合唱		0.65
音楽表現基礎演習		0.65
こどもの健康指導		0.55
幼児音楽Ⅰ		0.52
保育内容(音楽表現)		0.41
乳児保育演習		0.39
因子間相関	0.60	—
α係数	0.89	0.71

全体的に感性をより重視する科目が多く集まっており、感性に基づく表現がより強く求められる特徴から、因子を「感性」と命名した。この因子のα係数は0.71であった。

なお、2因子間はやや強い正の相関関係が認められる(0.60)。得られた「知識」因子と「感性」因子が構成する尺度を「学内学習尺度」とする。

(3) 学内学習尺度による分類について

「知識」因子と「感性」因子それぞれの因子得点を用いてWard法による階層的クラスター分析を行った。

本調査のクラスター分析では、出力されたデンドログラムに基づき3つのグループに分類することができる。各クラスターにおける因子別の記述統計量および分散分析結果を表3に示した。

第1クラスターには26名、第2クラスターに56名、第3クラスターには10名の調査対象が含まれていた。人数比の偏りを検討するために χ^2 検定を行ったところ、有意な人数比率の偏りがみられた($\chi^2 = 35.57, df = 2, p < .001$)。

表3 各クラスターにおける因子別の記述統計量および分散分析結果

因子名	クラスター名	度数	平均	標準偏差	最小	最大	平方和	df	平均平方	F	
知識	第1クラスター	26	1.18	0.61	0.24	2.50	群間	55.945	2	27.97	91.15***
	第2クラスター	56	-0.35	0.55	-1.85	0.57	群内	27.312	89	0.31	
	第3クラスター	10	-1.12	0.38	-1.73	-0.65					
感性	第1クラスター	26	1.00	0.61	-0.10	1.98	群間	47.21	2	23.60	89.24***
	第2クラスター	56	-0.23	0.49	-1.19	0.90	群内	23.54	89	0.26	
	第3クラスター	10	-1.35	0.27	-1.88	-1.03					

***p<.001

次に、得られた3つのクラスターを独立変数とし、「知識」「感性」を従属変数とした分散分析を行った。その結果、「知識」「感性」ともに有意な群間差がみられた(知識： $F(2,89)=91.15$,感性： $F(2,89)=89.24$,ともに $p<.001$)。TukeyのHSD法(5%水準)による多重比較を行ったところ、「知識」「感性」ともに第1クラスター>第2クラスター>第3クラスターという結果が得られた(図1と図2)。

第1クラスターは、知識系および感性系の科目評価が一番高いグループであった。この特徴から、第1クラスターを「学習得意群」とした。

第2クラスターは、知識および感性の科目評価が中程度のグループであった。この特徴から、第2クラスターを「学習中間群」とした。

第3クラスターは、知識および感性の科目評価が一番低いグループであった。この特徴から、第3クラスターを「学習苦手群」とした。

つまり、調査対象である保育系学生はその学内学習習得度において、「学習得意群」、「学習中間群」と「学習苦手群」に分類された。

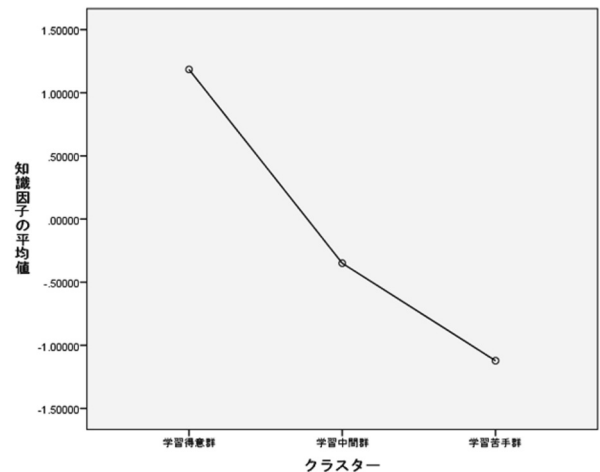


図1 知識因子と学内学習習得度との関連

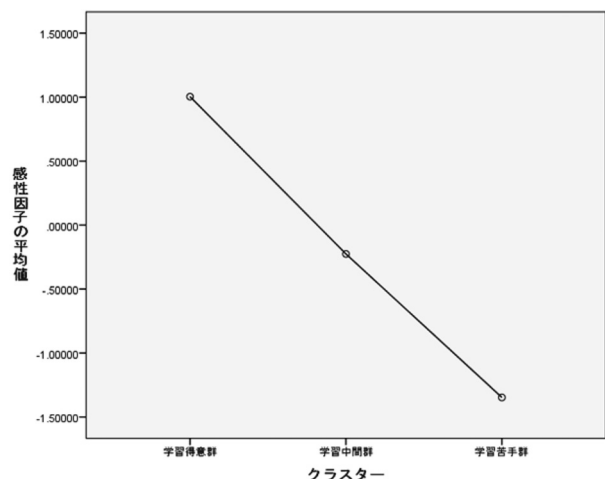


図2 感性因子と学内学習習得度との関連

(4) 保育系学生の学内学習習得度と保育実践力との関連について

保育系学生における「学習得意群」、「学習中間群」と「学習苦手群」という3タイプの学内学習習得度によって、実習における評価、つまり保育実践力が異なるかどうかを検討するために、1要因の分散分析を行った。各群の保育実践力を表す得点を表4に示した。その結果、群間得点差は1%水準で有意であった ($F(2,81) = 8.21, p < .01$)。TukeyのHSD法(5%水準)による多重比較を行ったところ、学習得意群が他の2群に比べて有意に高い得点を示していた(図3)。

表4 学内学習習得度における保育実践力の記述統計量および分散分析結果

	度数	平均	標準偏差	最小	最大	平方和	df	平均平方	F
学習得意群	26	3.96	0.47	3.00	5.00	群間	5.97	2	2.98 9.90***
学習中間群	51	3.49	0.60	2.00	4.50	群内	24.42	81	0.30
学習苦手群	7	3.07	0.35	2.50	3.50				

** $p < .01$

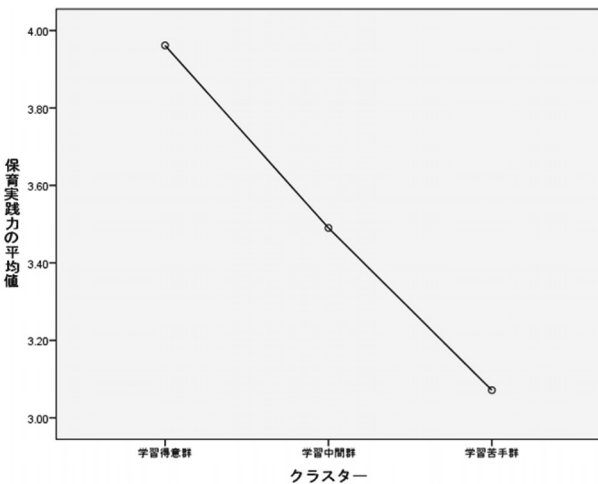


図3 保育実践力と学内学習習得度との関連

6. 考察

(1) 学力3要素から考える学内学習習得度と保育実践力との関連について

学内学習尺度の「知識」因子と「感性」因子には明らかな関連性が認められ、知識系科目の高得点群は感性系科目でも高得点を得ていることが確認された。これは文部科学省が学力の3要素としている(1)基礎的・基本的な知識・技能(2)知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等(3)主体的に学習に取り組む態度(高大接続改革提言では「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」、29年度告示幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領では「学びに向かう力、人間性等」)のうち、(1)知識・技能と(2)表現力が互いに相関し、総合的に習得されていることを示唆していると解釈できる。

さらに学習得意群では保育実習評価と教育実習評価に表れる保育実践力においても高得点を得ていることから、学力3要素の知識系と表現系において高い習得度を示している学生は実習評価として欠かせない(3)主体的に学習に取り組む態度についても高評価であることが示唆される。

以上のことから、学内学習習得度と保育実践力には関連性があるだけでなく、学力の3要素全般に渡っての学力が身に付いている学生については、それらが保育現場での実践力にも反映されていると考えることができる。

(2) 学内学習評価の客観性について

65科目の専門教育科目のうち、42科目については正規分布が認められなかったため因子分析に用いたのは23科目となった。これが意味することは、ほぼ3分の2の専門科目では学習評価の客観性が解析上は担保されていないことを指す。

これにより、学力3要素(2)のうちの「表現力」や(3)主体的に学習に取り組む態度などを学内にて客観的に評価する困難さが課題として浮き彫りとなった。即ち、人間性や関心意欲・態度への評価と、「知識・技能」や「思考力・判断力」などへの評価との間に明確な評価基準を設ける必要性が示唆されたと考える。また、一つの科目の中で、それらすべてに対して評価する限界も伺えることから、科目によって習得する学力要素を区別する必要性があると言える。

保育実践では、保育課題設定から始まり、保育観察、遊びと生活指導、環境構成などの保育実践及び保育記録作成など、実際の保育実践力にはPDCAサイクルに象徴される反省点を次への課題再設定に生かす総合的実践能力が問われている。子どもや保育現場教職員からは好かれる人間性を備えつつ、その資質が日頃の学内学習習得度に反映されていくことができれば、真の実践力を高めることにつながると言えよう。

7. 結び並びに今後の課題

学内学習習得度と保育実践力との関連が授業者の主観によらない客観的なデータとして裏付けられた点は前回の研究ノートより前進した点である。今後も継続的なデータの蓄積による分析と共に、保育実践力を高めるためにはどのような学習内容が特に求められているのかについて効果的に分析し、実習事前指導に反映させていくことが求められている。

謝辞

本稿の調査科目分析の際し、教務課の皆様には多忙な業務に関わらず対象者のデータ抽出にご協力頂き、感謝申し上げます。

文 献

- 1) 厚生労働省 29 年度告示「保育所保育指針」(2017) フレーベル館
- 2) 文部科学省 29 年度告示「幼稚園教育要領」(2017) フレーベル館
- 3) 無藤隆「3 法令改訂の要点とこれからの保育」(2017) チャイルド本社
- 4) 内閣府 29 年度告示幼保連携型認定こども園教育・保育要領 (2017) フレーベル館
- 5) 中島健一郎・中嶋一恵・甲斐晶子・浦川末子・白石景一・下釜綾子・永野司・中村浩美・滝川由香里・本村弥寿子 (2014)「保育者養成校における学内と学外の学びの連続性についての探究的検討」長崎女子短期大学紀要(38), 94-101.
- 6) 二宮貴之・櫻井京子・井上聖子 (2015)「幼稚園教育実習 I 実習指導の取り組みについて(その 2)」西九州大学子ども学部紀要 (7), 35-48.
- 7) 丹羽ヤエ子 (2009)「保育実習における保育所評価と学生自己評価に関する考察」永原学園西九州大学短期大学部紀要(40), 97-106.
- 8) 民秋言「幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領の成立と変遷」(2017)萌文書院
- 9) 田中敬一 (2014)「教育実習学生指導に関する一考察」八戸学院短期大学紀要 (38), 1-10.
- 10) 海野展由・高向山・小野真裕美 (2015)「保育者養成校における学生の学内成績評価と実習評価の関連性について」常葉大学健康プロデュース学部雑誌 (10), 137-142.
- 11) 山際勇一郎・服部環 (2016)「文系のための SPSS データ解析」ナカニシヤ出版
- 12) 文部科学省ホームページ
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/genngo/1300857.htm (新学習指導要領「生きる力」)
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/02/15/1381 (高大接続改革の動向)
(2017.9.11 受稿, 2017.10.2 受理)